

## 地方都市における高校生から見た将来の居住意向に関する一考察 —高知県安芸市におけるケーススタディー—

高知大学 学生会員 ○中村 純也  
高知大学 正会員 坂本 淳

### 1. 研究の背景と目的

人口減少と高齢化による地方のまち・生活への影響は、生活利便性や地域の魅力の低下を通じて、さらなる人口減少を招くという悪循環に陥ることが考えられる。人口減少が深刻な地方都市において、将来世代にわたって魅力的なまちづくりを継続させるためには、そこで生まれ育った若者が将来地元に住むことが方策のひとつと考えられる。そこで本研究では、人口減少が深刻な問題となっている高知県安芸市を対象として、将来の居住意向を分析し、若者が地元に住み続ける、あるいは地元でUターンするための方策について考察する。

### 2. 研究方法

研究に用いるデータは、高知県立安芸高校、高知県立安芸桜ヶ丘高等学校の1～3年生を対象として、2020年10月に高校を通じて実施したアンケート調査である。計314名の回答結果を回収したが、本研究では将来の居住意向の考察という目的から、安芸市に居住する122人の結果のみを用いる。本研究に関連する質問項目は、学年、安芸市のまちづくり上の課題（5段階評価）、卒業後の進路希望・希望職種（多肢選択）、将来の居住意向（択一選択）とその理由である。一元配置分散分析を用いて「将来の居住意向」と「各回答結果」の差の有意性を確認し、その結果に基づき考察する。

### 3. 結果と考察

#### 3-1 将来の居住意向

出身県へのUターン年齢の分布<sup>1)</sup>によると、そのピークは22歳であるものの、20代半ばから30代頃までは一定程度のUターンが続いている。つまり、一度大学進学などで地元を離れ、その後すぐに地元に戻らない者でも、30代頃までは徐々に戻る可能性があることを示している。そこで本研究では、将来（回答者が40歳、50歳になったとき）の安芸市への居住意向について質問した。回答結果を図-1に示す。「わからない」という回答が半数を占めている一方で、残りは「安芸市に住みたくない」という回答が過半数（31%）となった。地元に住み、地元の高校に通っている者でも、将来は地元に住みたくないという者が多いということである。

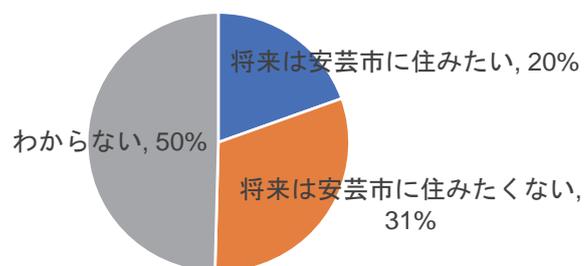


図-1 将来の居住意向

#### 3-2 一元配置分散分析

一元配置分散分析を用いて、上記の結果と各質問項目の結果の差の有無を確認する。有意に差が見られたものを図-2から図-4に示す。図中の赤線は、Turkeyの方法で多重比較を行い、5%の有意性が見られたものである。例えば「図書館の利用しやすさ」では、「将来は安芸市に住みたい」と「将来は安芸市に住みたくない」の間のみで有意差がみられるということである。

図-2より、公園や図書館に対して不満を感じている者は、将来安芸市に住みたくないことがわかる。また図-3から、高校・大学を卒業してから住みたい地域では、安芸市を希望する者ほどそのままそこに住み続けたいと考え、大都市圏を希望する者ほど、10～20年後の将来も安芸市に戻りたくないということがわかる。個別データの関係より、公園や図書館に対する改善を要望する者は、高校・大学卒業後は高知県内（安芸市以外）を希望しているという事実を踏まえれば、大規模な図書館（オーテピア）や公園（春野総合運動公園）が充実している高知市へ将来住みたい者が多いことが推察される。

図-4は、高校・大学を卒業してから住みたい地域が決まっている者を対象として、その地域を選択した理由を尋ねた結果である。前述のように、希望する仕事や所得の高い仕事については有意な差が見られず、「広い世界で活躍できそう」と考える者は将来安芸市に住みたいと考えておらず、家族と一緒にいたいと考える者は将来も安芸市に住み続けたいという事実が把握できる。つまりここから、彼らは安芸市に住み続けていては狭い価値観や視野しか得ることができないと漠然と考えているということが推察される。

なお著者らは分析時に、年齢が若い者ほど将来のことがわからない、あるいは、地元が不便で買い物を楽しめる場所がない、地元で希望する仕事や所得が高い仕事がないと考える者ほど、将来は都市に住みたいのではないかと想定していたが、これらの間に有意性は認められなかった。

#### 4. まとめ

安芸市に住んで地元の高校に通う高校生に、将来安芸市に住んでもらうための方策のひとつとして、公共施設を整備することが効果的である可能性がわかった。安芸市の図書館は老朽化していることから、更新時にはワークショップなどを行い、高校生の意見を取り入れることも有効であろう。また、後継ぎなどの理由で将来の安芸市での居住を希望する者に対しては、行政が現在の産業を維持するなどの支援が必要となってくるだろう。その他、将来は大都市で働き、地元に戻るつもりはない者に対しては、これまでのような物理的な社会だけで物事を考えるのではなく、サイバー空間を活用することで、「地方に住むこと＝狭い世界でしか活躍できない」という意識を変える取り組みも必要だろう。Society 5.0 時代の本格的な実現に期待したい。

【謝辞】 調査実施に協力いただいた安芸市市都市建設課、安芸高校、桜ヶ丘高校のご担当者様に感謝いたします。

#### 参考文献

- 1) 総務省、これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会（第2回）（2016年11月開催）、[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/kenkyu/ijyuu\\_koryuu/02gyosei08\\_04000143.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/ijyuu_koryuu/02gyosei08_04000143.html)

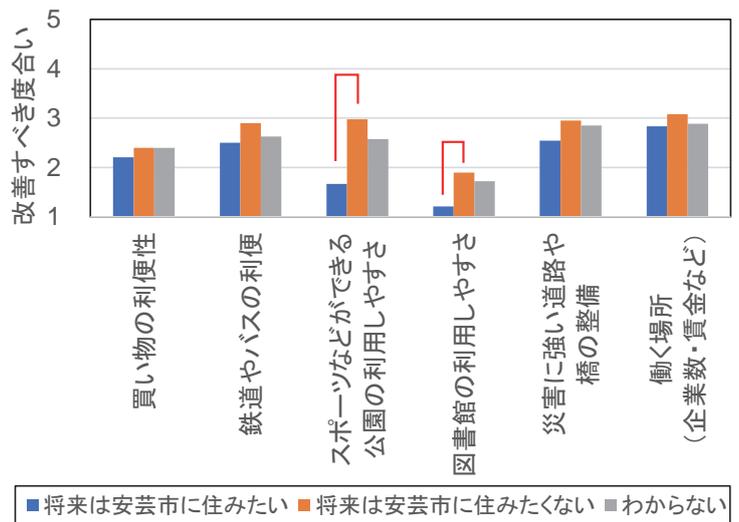


図-2 将来の居住意向と安芸市の課題

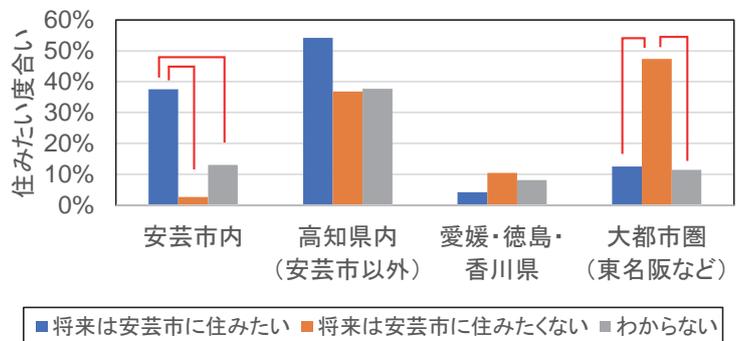


図-3 将来の居住意向と卒業後の就職希望地

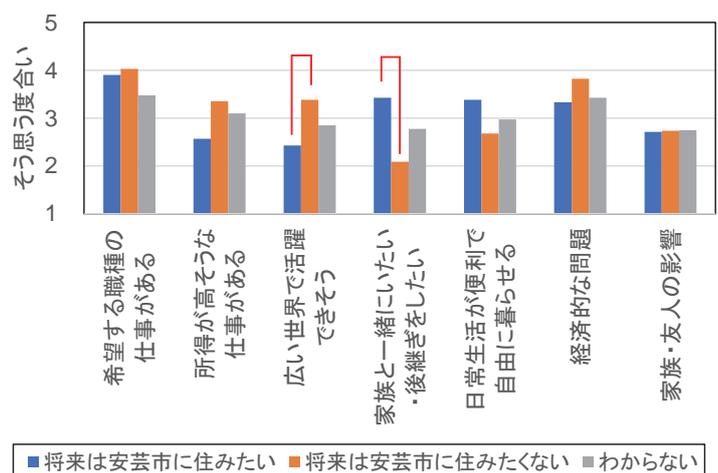


図-4 将来の居住意向と卒業後の就職希望地の理由